

パノラマ展望： 滝の水公園コース

地下鉄鳴子北駅 → 鳴子池 → 鳴子団地 → 螺貝池 → 滝の水公園 → 滝ノ水緑地 → 融傳の泉の碑 → 地下鉄神沢駅 (約6km)

※健脚の人は、融傳の泉の碑から鳴海配水塔 → 戸笠公園を周遊して地下鉄相生山駅 (約8km) へのコースあり。

① 鳴子池・藤川

鳴子池は、藤川池と言われたこともあり、藤川の中流部にため池として享保10年(1725)に造られた。面積は約1.8万㎡だったが、今は約2/3埋め立てられた。

長さ約3kmの藤川は天白川の支流で、水源は桃山や梅里、螺貝や天白区の久方・相生地区である。上流部には戸笠池がある。

この川が天白区と緑区の境界となっている。

② 鳴子団地

旧鳴海町を名古屋市ベッタタウン化する第1弾として、旧日本住宅公団が昭和35年(1960)着工、37年夏から41年春にかけて入居が始まった。一時は2千戸を越す市内でも有数の団地となった。しかし、最近、老朽化が目立ち建て替えが進み、新しい街に生まれ変わろうとしている。

昔は忘帰園という梅林があり、地元の人憩いの場所だった。

③ 螺貝池

鳴海町の灌漑用のため池は、寛永年間(1624～44)に造られたものが多い中で、少し後の正徳5年(1715)春に完成した。広さは約2.1万㎡あったが、近年、一部が公園として整備された。

『螺貝』とは『ほらがい(洞谷)』とよばれていた場所を当て字として表記されたものだろう。

④ 滝の水公園・愛知薬学校跡地

伊勢湾台風で出た被災家財等を集積してあった場所で、その後、土で覆い人工的に作られた公園。斜面は灌木が繁茂していて、上部は一面芝生広場で憩いの場として知られている。周囲に障害物が少ないために見晴らしがよく、名古屋の高層建築物や、天気の良い日には遠くの山並みを見られる。

また、ここは、昭和6年(1931)4月に私立愛知薬学校が開設された場所でもある。翌年、鳴海駅から定期バスが運行されるようになった。昭和11年(1936)専門学校となり、戦後名古屋市立大学薬学部になった。公

園の西側に「名古屋薬学専門学校跡」の記念碑がある。

⑤ 滝ノ水緑地

昭和54年(1979)167万㎡の72%が山林だった滝ノ水一帯の土地区画整理を行った。その一部が滝ノ水緑地として残され、池や湿地も保存されている。この辺りに小さな2段の滝があったことから滝ノ水という地名がついたといわれている。

⑥ 融傳の泉の碑 (神沢南公園)

「尾張名所図会」「張州府志」に、言い伝えが載せられている。

昔、東郷町にある祐福寺の第四世融傳永乗が、熱田神宮へ行く道すがら一匹の狼が現れ、大きな口を開けて向かってきた。よく見ると、のどに骨がつかえて苦しんでいる。そこで、和尚はその骨を取り除いてやったら、狼は喜んで山中へ姿を消した。

その後、和尚がいつものように熱田神宮へ参詣するとき、この辺りで急にのどが渇き、錫杖(しゃくじょう)で地面をたたくと清水が湧き出し、のどを潤すことができた。この清水は、道行く人々に大変喜ばれ、融傳の泉として石碑が建てられた。しばらく行方不明だったが、住宅開発中に発掘され、元あった場所に近い神沢南公園に新しく台座を設けて建立された。

◎ 神沢の成り立ち

神沢という地名は、神様のいる近くの沢地という意味なので、本来は徳重熊野社の北側一帯の神沢池周辺のことを指す。しかし、戦後黒石地区の一画で土地区画整理事業が進み、新設中学校の校名が神沢と決まったことで新住宅表示が神沢と名付けられた。

⑦ 鳴海配水塔

昭和57年(1982)、名古屋市は東南部の市域に浄水を送るために標高約90mの頂に巨大な配水塔を作った。様々な場所から遠望され、空飛ぶ円盤かと見間違えるような外観である。容積は、小学校プール約60杯分。木曾川から取り入れられた水を、春日井にある浄水場で浄化して千種区の東山配水塔からここに送られてくる。全て自動制御されていて普段は無人。

⑧ 戸笠公園

相生山団地の南に戸笠池を中心に約9万㎡の緑地公園がある。池では遠くから飛来する渡り鳥を見ることができ、東岸は水草が生い茂り、カイツブリやカルガモなどの繁殖地になっている。江戸時代に戸部村・笠寺村のため池で、天白川の下に樋をくぐらせ、今の南区の方へ灌漑用水として流した。

古くて新しい街徳重・熊野社コース

地下鉄徳重駅 → 緑文化小劇場 → 要池 → 神沢川 → 神沢池 → 御林と里山の景観 → 熊野社 → 正観音堂 → 扇川緑道 → 地下鉄徳重駅 (約5km)

※健脚の人は、熊野社より毘沙門天像まで往復約30分。さらに、扇川緑道を通らず熊亀橋から南へ八重桜の道を進み鶴ヶ沢霊園 → 梨の木公園 → 通曲公園 → 新徳重橋 → 地下鉄徳重駅 (合計約7km) へのコースあり。

◎ 徳重の成り立ち

古窯跡がこのあたりでも多く見つかることから、奈良時代から陶工の集団が移動しながら陶器(須恵器類)を作り、各地へ運び仕事をしてきたことは間違いない。しかし、この地に居つき生活した遺構は見いだせない。

集落が形成されたのは、室町時代ごろと考えられる。1600年代にため池が多く作られていることから考えると、江戸時代初期には数家族の小集落が散在していたと思われる。
さなげせいなんろくこようしぐん
《猿投西南麓古窯址群》

昭和30年代に始まった愛知用水の建設と昭和40年代に入ってから住宅開発により、多くの古窯跡が見つかった。

鳴海地区では約90ヶ所知られているが、ほとんどが整地されてしまい跡かたは残っていない。整地した時に発掘された須恵器や陶器は、名古屋市博物館等に保管されている。古窯跡は猿投西南麓古窯址群と言われ、奈良時代から室町時代に至るまで長期にわたり作られた古窯。初期は釉薬のない灰色の須恵器だった。その後、次第に灰を載せた灰釉(かいゆう)陶器が作られ、亀が洞地区では貴重な緑釉(りょくゆう)陶器が発掘された。終末期には、粗末な山茶碗(やまちゃわん)や山皿(やまざら)が大量に生産されて役割を終えた。

① 要池

桃山・梅里・黒石などからの湧き水や小川・神沢川などの水を集めていることから扇の要という意味で名付けられたといわれている。広さは約3.5万㎡の大きな池だったが、道路の拡張や住宅地造成などの影響で狭められた。この池の水は、江戸時代に南区の要町に灌漑用水として送られていた。

② 神沢川・神沢池

神沢池から流れてくる川を神沢川という。神沢池は1.5万㎡の広さで、東面は自然が残されていて、かつての里山の風景が感じられる。この森は、江戸時代の藩有林の一部で“御林(おはやし)”と呼ばれ、立ち入り禁止だったが、明治政府になってから民間に払い下げられた。

③ 熊野社

熊野社は、かつて現在の相原諏訪社にあったが、後に戦いの神として信仰の厚い諏訪明神を勧請したため、熊野社を東の山奥にある場所へ移転した。その結果、神ノ倉(かんのくら)という地名や神沢・熊ノ前などの地名が生まれた。ここも尾張藩の藩有林の一部と思われる。

近年、自家用車で訪れる参詣客が増えたので、樹林の一部を伐採して車道や駐車場を整備した。江戸時代には桜の名所として、鳴海宿から見物に訪れる人もいた。

④ 毘沙門天像

熊野社本殿の北側に細い道が北東に向かって続いている。山道なのでそれなりの靴を履いていけばたどり着ける。大正時代、近隣の集落の人たちが地区の繁栄と安寧を祈願するために建てた。花崗岩を産出する岡崎の石工に彫らせて、この山上まで延々と引いてきた。大正10年(1921)に設置。

⑤ 正観音堂

熊野社の参道入り口にあり、社の中に道標観音が鎮座している。これは、白土道(しろつちみち)と熊野社参道とのY字路にあり、「右あすけ道」「左くまの権現道」と記されている。

⑥ 鶴ヶ沢霊園

古来、地域の人々が墓地として使っていた。明治30年(1897)に長翁寺が関わって埋葬地として一般化した。昭和57年(1982)周囲が住宅地として開発され、墓地を改修して鶴ヶ沢霊園として発足した。中央に、白土にあった道標地蔵が据えてある。「右あすけ」「左のかた」と彫られている。「のかた」は日進市。南側に広がるのはみどりが丘公園墓地。

⑦ 梨の木公園

ため池の梨の木池を公園化した。豪雨の時には貯水できるように作られている。桜が見事。

⑧ 通曲公園 (天保時代は通利金)

3.2万㎡ある大きい公園。野球場やテニスコートが設置され、ランニングコースなどもある。二つ池と呼ばれる調整池があり緑も多い。古窯もあった。

参考資料

緑区誌・名古屋史シリーズ緑区の歴史・名古屋市の史跡と文化財・名古屋市史・愛知百科事典